



帯広畜産大学

Obihiro University of Agriculture and Veterinary Medicine

離乳後子牛へのコーンサイレージ給与が初産分娩までの発育に及ぼす影響

著者	堀田 はるか
雑誌名	畜産フィールド科学（帯広畜産大学畜産フィールド科学センター年報）
巻	8
ページ	130-130
発行年	2012-07-23
URL	http://id.nii.ac.jp/1588/00003806/

5: 離乳後子牛へのコーンサイレージ給与が初産分娩までの発育に及ぼす影響

畜産フィールド科学センター 技術職員 堀田 はるか

メールアドレスharuka@obihiro.ac.jp

研究の概要

【目的】

当センターでは飼料コスト削減のため、離乳後の子牛に配合飼料の代わりにコーンサイレージと大豆粕、ミネラル、ビタミン剤からなる混合飼料を給与している。2008 年に行われた試験の結果、コーンサイレージ給与子牛の発育に問題はなかったが、本調査では初産分娩までの長期にわたる発育について分析する。

【方法】

当センターで月に 1 回行っている体格測定の結果を用い、配合飼料を給与していた 2006-2007 年度と、コーンサイレージを給与していた 2009-2010 年度にそれらの飼料を給与されていた子牛の、初産分娩までの体高と体重の結果を比較した。対象となったコーンサイレージ給与牛の中にはまだ初産分娩していない牛も多いが、現段階で得られた結果を分析した。

【結果】

体高は、配合飼料給与牛、コーンサイレージ給与牛ともに日本ホルスタイン登録協会の標準発育値よりも高く推移していた。当センターでは初回AI対象となる体高の基準値を120cmとしているので、120cmに達する月齢の平均を算出したところ配合飼料給与牛が9.3か月齢、コーンサイレージ給与牛が9.6か月齢となった。体重は、配合飼料給与牛は体高と同様に標準発育値よりも高く推移し、コーンサイレージ給与牛は22か月齢までは標準発育値内、それ以降は標準発育値よりも高く推移した。初回AI対象となる基準値の350kgに達する月齢の平均は、配合飼料給与牛が11.5か月齢、コーンサイレージ給与牛が13.4か月齢となった。コーンサイレージを給与した牛のほうが発育が遅いという結果になったが、コーンサイレージ給与牛のほうが標準発育値に近く、むしろ配合飼料給与牛が過肥であると考えられた。

今後は、これから得られるデータを含めた分析、初回AI時の月齢、繁殖状況、初産分娩時の月齢、疾病、初産分娩後の乳量などを分析し、さらに考察を深めていきたい。